

『枕草子』「少し春ある心地こそすれ」の解釈と対応

— 『白氏文集』「南秦雪」の享受と変容の様相 —

古 瀬 雅 義

はじめに

世に「一条朝の四納言」の一人と称されるようになる藤原公任が『枕草子』には参議として一章段のみ登場する。中宮に従って上の御局に伺候していた清少納言に対して、二月末にもかかわらず粉雪まじりの風が強く吹いていた時分のこと。「公任の宰相殿」が懐紙に「少し春ある心地こそすれ」と和歌の下句を書き付けた文を寄越してきた。折から一条天皇が訪れていたため、中宮定子に相談する事もできないまま主殿司から返事を急かされた清少納言は、「さばれ」と思い切りつつも恐れに打ち震えながら「空寒み花にまがへて散る雪に」と上句を付けて返した。その評価は知りたいけれども、批判されていたら聞きたくないなどと気に掛けていたが、結果的に源俊賢が「なほ内侍に奏してなさむ」と賞賛していたと「左兵衛督の中將におはせし」人から伝え聞いた、といういきさつまで記した

日記的章段である。

昭和十三年に金子彦二郎氏が、この贈答は『白氏文集』巻十四所収の七言律詩「南秦雪」の一節をふまえたものであると指摘されて以来、当該章段はこの説をふまえて解釈されてきた。公任から届いた下句（問い）とそれに返した清少納言の上句（答え）が、当該漢詩の頷聯「三時雲冷多飛雪、二月山寒少有春」を共通理解としていたことは首肯されるべきであろう。しかし、公任が送りつけてきた「少し春ある心地こそすれ」の解釈には、諸説間に対照的な振幅が存在する。すなわち「わずかに春の気配が感じられる」と肯定的に見る説と、「春らしい感じはきわめて少ない」と否定的に見る説があり、どのように解釈すべきか、未だ解決を見ていないのである。

清少納言が返した上句「空寒み花にまがへて散る雪に」については、「空が寒いので、花が散ると見まがうように雪が降ってきて」という解釈に諸説変わりはないが、公任からの問い（下句）に対し

て清少納言が上句を付けて返したのであるから、契機となった公任の問いかけの解釈に振幅がある以上、清少納言がこのように上句を付けた対応の論理も連動することになる。この解決を図るため、このやりとりのコンテクストとして機能している『白氏文集』「南秦雪」の当該句本来の解釈と『枕草子』本文に記されている〈場〉の状況から、まずこの表現の意図するところを比較し、さらに話の展開を詳細に分析することを通して考察してみたい。

一、「少し春ある心地こそすれ」の振幅

当該章段は『枕草子』第一〇二段「二月つごもりころに」として見える。二月末日ごろ、風が強く吹き、雲が黒く立ちこめて、雪が少しちらつく空模様であった時、黒戸に来た主殿司が、応対に出て来た清少納言に、懐紙に記された公任宰相からの手紙を渡すところからはじまる。

〈資料一〉『枕草子』第一〇二段「二月つごもりころに」¹⁾

二月つごもりころに、風いたう吹きて、空いみじう黒きに、雪少しうち散りたるほど、黒戸に主殿司来て、「かうて候ふ」と言へば、寄りたるに、「これ、公任の宰相殿の」とてあるを見れば、懐紙に「少し春ある心地こそすれ」とあるは、げに今日のけしきにいとようあひたる、これが本はいかでかつくべからむと、思ひわづらひぬ。

「誰々か」と問へば、「それぞれ」と言ふ。みないとはづかしき中に、宰相の御いらへを、いかでか事なしびに言ひ出でむと、心一つに苦しきを、御前に御覽せさせむとすれど、上のおはしましで御殿籠りたり。主殿司は「とくとくと」と言ふ。げに遅うさへあらむはいと取り所なければ、「さはれ」とて「空寒み花にまがへて散る雪に」と、わななくわななく書きて取らせて、いかに思ふらむと、わびし。これが事を聞かばやと思ふに、もしられたらば聞かじとおぼゆるを、「俊賢の宰相など、『なほ内侍に奏してなむ』となむ定め給ひし」とばかりぞ、左兵衛督の中將におはせし、語り給ひし。

当該章段には一条天皇（上）、中宮定子（御前）をはじめ、内裏に伺候していた錚々たる殿上人たちの名が登場する。清少納言が活躍した時期にあわせて確認してみたい。

〈資料二〉本文に記された人物たち

①公任の宰相殿（藤原公任） 康保三年（九六六）生。小野宮流の故関白太政大臣頼忠の長男。正暦三年（九九二）任参議、長徳二年（九九六）任右衛門督、檢非違使别当、長保三年（一〇〇二）八月任中納言。

②俊賢の宰相（源俊賢） 天徳三年（九五九）生。故西宮左大臣源高明の息。道長室の明子や経房の兄。長徳元年（九五五）任参議。長保三年八月任右近中將。一条朝四納言の一人。

③左兵衛督の中將におはせし（三卷本勅物「実成卿歎」）

藤原実成は内大臣公季の長男。天延三年（九七五）生。長徳四年（九九八）十月任右近中將。寛弘元年（一〇〇四）二月任藏人頭。寛弘六年（一〇〇九）三月任左兵衛督。

ここで③「左兵衛督の中將におはせし」と記された人物については、三卷本勅物に「実成卿歎」と記されることに疑義を挟む説もあるが、ひとまず実成に従っておきたい。³⁾なお長徳二年から長保三年までの間の「左中將」は、藤原正光・藤原斉信・藤原頼親・源経房・源頼定があり、「右中將」は、藤原道綱・源宣方・源経房・源頼定・源成信・藤原実成・藤原成房・源俊賢の名が見える。また「左兵衛督」を勤めた人物として、藤原高遠（長徳三年九月〜寛弘元年十二月）・藤原懐平（寛弘元年十二月〜寛弘六年三月）・藤原実成（寛弘六年三月〜長和六年（一〇一七）四月）の三名が確認できる。

公任・俊賢・実成ともに『枕草子』に当該章段のみ登場する人物である。その公任宰相から届いた懐紙に「少し春ある心地こそすれ」という和歌の下句が記されていた。まずこの下句の解釈について、従来の説を整理してみよう。

〈資料三〉公任「少し春ある心地こそすれ」の解釈

①此歌、心あきらかなり。即俊賢より送られし歌の句なり。前の詞書をとりあはせみるべし。（加藤馨齋『清少納言枕双紙抄』⁴⁾）
②雪など降荒て春色の少き心也。（北村季吟『枕草子春曙抄』⁵⁾）

③わづかばかり春のある気持がする。

（金子元臣氏『枕草子評釈』⁶⁾増訂版）
④春二月とは名のみで、春らしい趣はきわめて少ないの意。

（五十嵐力氏・岡一男氏『枕草子精講 研究と評釈』⁷⁾）
⑤いささか春の気配を感じる意。
（塩田良平氏『枕草子評釈』⁸⁾）

⑥わずかに春の気配があるようだ。

（石田穰二氏 角川ソフィア文庫『枕草子』⁹⁾）
⑦ちょっぴり春らしい心地がする。

（稲賀敬二先生 鑑賞日本の古典5『枕草子』¹⁰⁾）
⑧ちょっと春めいた気分がするじゃないか。

（萩谷朴氏『枕草子解環』¹¹⁾二・新潮集成も同）
⑨少しばかり春がある気持がする。

（川瀬一馬氏 講談社文庫『枕草子』¹²⁾）
⑩風が吹いて寒いし、空も黒いが、雪が散らついている今日の情景は「白楽天」の詩の「二月山寒くすこし春あり」とそっくりですね。（田中重太郎氏 対訳古典シリーズ旺文社『枕草子』¹³⁾）

⑪少し春があるような気持がする。
（松尾聰氏・永井和子氏 新編日本古典文学全集『枕草子』・旧全集と同）

⑫少し春らしさを感じることです。
（上坂信男氏・神作光一氏 講談社学術文庫『枕草子』¹⁴⁾）

一方、解釈や現代語訳を記していないものに、武藤元信氏『枕草子通釈』・関根正直氏『枕草子集註』・池田亀鑑氏『全講枕草子』・田中重太郎氏『枕冊子全注釈』がある。

②北村季吟『枕草子春曙抄』と、④五十嵐力氏・岡一男氏『枕草子精講 研究と評釈』の解釈が「春らしくない」と否定的に捉えているのに対し、それ以外の多数の説が「少しは春らしい感じがする」と肯定的に解釈しており、両者の間には対照的な振幅が存在する。

さらに本文に「げに今日のけしきに、いとようあひたる」とあることから、書き手清少納言は「今日の様子に、よく合っている」とみていたことになる。

ここで注目したい解釈として、③金子元臣氏『枕草子評釈』の〔釋〕をあげておきたい。金子元臣氏は「すこし春あるこ、ちこそすれ」について「空寒く雪さへ降りて、春とも覚えぬど、とにかく二月も晦日にて、春の半なれば、かくいへり。こ、は雪の花かと思ゆるを「すこし春ある」といへるにあらず」と説かれている。寒空に雪さえちらつくという今日の様子は、ちっとも春らしいとは思われないのだけれど、二月も末で春の半ばでもあるので、公任は「少し春ある心地こそすれ」と詠んで寄越したのだとし、さらに雪を花と見立てて「少し春ある」と言ったのではない、と解釈されている。すなわち公任から送られた下句の意味は、春らしさは実感されませんが、二月も末になるので時期的に「少しは春らしい心地がする」と言ったの

だ、とみるのである。

二、「空寒み花にまがへて散る雪に」の解釈

この公任からの問いかけ（下句）に対し、清少納言は主殿司から急かされるままに「空寒み花にまがへて散る雪に」と上句を付けて返した。この上句について、先学の解釈を整理してみよう。

〈資料四〉清少納言「空寒み花にまがへて散る雪に」の解釈

①此歌の心、前の歌の心にかよひて、聞へやすし。前の歌の詞書とよく見合せ味はふべし。（加藤磐斎『清少納言枕双紙抄』）

②花にまがへてちる雪にといふにて、少し春あるをあへしらへる也（北村季吟『枕草子春曙抄』）

③空が寒さに、花に似せてうち散る雪に

（金子元臣氏『枕草子評釈』増訂版）

④空が寒いので、花に似せて散る雪によって、の意。

（五十嵐力氏・岡一男氏『枕草子精講 研究と評釈』）

⑤空が寒いので、落花に見まがうばかり降ってくる雪を眺めると。（塩田良平氏『枕草子評釈』）

⑥空の寒さにまるで花ともみまがうばかりに雪が散り落ちるので

（石田穰二氏 角川ソフィア文庫）

⑦空が寒いので花の散るのに見まがうような雪が散り落ちてきて（稲賀敬二先生 鑑賞日本の古典5『枕草子』）

⑧空が寒いので花に見まがうばかりに散る雪に

(松尾聰氏・永井和子氏 新編全集・旧全集同)

⑨空が寒くて花に見まがうように散る雪に

(川瀬一馬氏 講談社文庫)

⑩(おっしゅるとおり、そして白楽天の詩に)「さいますように、

きょうは)空が寒いので散る雪はまるで桜の花が散るよう(で)

ございました (田中重太郎氏 対訳古典シリーズ旺文社)

⑪空が寒いので花に見まがうばかりに散る雪に

(松尾聰氏・永井和子氏 新編日本古典文学全集・旧全集同)

⑫空が寒いので、花に見間違えるよう散ってくる雪に。

(上坂信男氏・神作光一氏 講談社学術文庫)

諸説を一覧してみても「空が寒いので、花が散ると見まがうように雪が降ってきて」という解釈に対して、振幅は全く認められない。

③金子元臣氏は『枕草子評釈』の「釋」において「空寒み云々」を「空の寒さに、花に似せて散る雪景色に、その花と見紛へらるゝ點が、すこしは春の心地する也。『散る』といへるも春の雪の趣なるべし」と説かれる。公任から届いた下句「少し春ある心地こそすれ」に対する書き手清少納言の評言「げに今日のけしきに、いとようあひた(る)(まこと)に今日の景色にとてもよく合致している」から、「すこしは春の心地する」理由を、空から散り来る雪を花と見まがうように見出し、「降る」ではなく「散る」と詠んでいる点に「春の雪」

らしさが感じられるとされる。金子元臣氏は、公任が寄越した下句を「わづかばかり春のある気持がする」(資料三)の③)として春の気配を肯定的にみる立場でとらえ解釈されるが、この解釈の論理は「春らしい感じはきわめて少ない」と否定的にみる説でも「春らしさを発見した反論」として十分成り立つだろう。清少納言は「今日のけしき」をどのようにとらえていたのだろうか。

当該章段の本文に記された天候の描写を、金子元臣氏は「詞書」とされている。公任からの下句と清少納言が返した上句をあわせて「空寒み花にまがへて散る雪に少し春ある心地こそすれ」という和歌ができたのだから、その時の状況を記した「詞書」として本文の描写が機能しているという点は、もちろん首肯されよう。

その上であらためて検証してみたい。「二月つごもりごろに／風いたう吹きて／空いみじう黒きに／雪少しうち散りたるほど」とある本文の描写からイメージされる状況は、「二月の末ごろ、風が強く吹き、空も雪雲に覆われて真っ暗で、雪も少しちらついている」という設定である。これは金子元臣氏が『枕草子評釈』の「釋」で指摘された「春とも覚えねど」という感覚と実のところ合致している。つまりこの本文の描写からは、「少し春ある心地」とはとても言えないのではあるまいか。

三、『公任集』所収の贈答の解釈

公任が寄越したこの下句「少し春ある心地こそすれ」は、『公任集』第七七番歌に別の人物との贈答句として見えることを塩田良平氏が指摘されている。¹³⁾

〈資料五〉『公任集』

人に、春のはじめなり

57 a すこし春ある心ちこそすれ

と、のたまひければ、

b 吹きそむる風もぬるまぬ山里は

この公任の問いかけの下句（第五七 a 番歌）は、『枕草子』において清少納言に対してなされたものと全く同じ問いかけであるが、どちらが先行するかは不明である。それに対する上句（第五七 b 番歌）は、「吹き始めた春風もまだまだ温かくない山里では」と答えしており、一首仕立ての贈答になっている。

公任の問いかけである第五七 a 番歌で「春の気配」をめぐる解釈を整理してみよう。伊井春樹氏、津本信博氏、新藤協三氏は『公任集全釈』において「少し春の訪れたような気配がしますよ¹⁴⁾」として春の訪れを感じられると肯定的にみる立場で解釈されるのに対し、後藤祥子氏は『平安私家集』所収の『公任集』において「春の気配もまだわずかという気がしますね¹⁷⁾」としてやや否定的にみる立場で

解釈される。また竹鼻績氏は『公任集注釈』において「ほとんど春らしい感じがしませんね¹⁸⁾」とほぼ否定する立場で解釈され、さらに『中古歌仙集一』所収の『大納言公任集』においても「ほとんど春らしい気がしないよ¹⁹⁾」と継承される。したがって肯定的にみる説と否定的にみる説があり、対照的な解釈がなされていることになる。

この贈答は詞書に「春のはじめなり」とあることから、「二月つごもりころ」とある『枕草子』の時とは異なり、春まだ浅い正月のはじめころにやりとりされたものということになる。第五七 b 番歌で詠まれた情景は、『古今和歌集』卷一春上で第二番歌として所収される紀貫之の歌「袖ひちて結びし水のこほれるを春立つけふの風やとくらむ」の発想を反転させて、春風が吹きはじめたとは言えず、山里ではまだ風が温かくならない、とするものである。それが順接で結合して一首仕立てを構成することから、この詠者は第五七 a 番歌の公任からの問いかけを「春らしさをまだ感じとることができない」と否定的にみる立場で解釈して、風が温まない山里では、まだ春らしさを実感できない、ということを軸に成り立っている贈答ということになる。

四、典拠の『白氏文集』『南秦雪』の解釈

清少納言に寄越した公任の下句「少し春ある心地こそすれ」は、『白氏文集』卷十四「南秦雪」をふまえたもので、清少納言はそれを理

解した上で「空寒み花にまがへて散る雪に」という上句を付けて返したというご指摘は、前述の金子彦二郎氏1によるものである。

金子彦二郎氏は両者の間で交わされたこの贈答が『白氏文集』『南秦雪』を出典とした応酬であると指摘され、「当日の眼前の景状に對して、此の兩人（公任・清少納言）がそれぞれ心々からおのづと詠出唱酬した当座即興の和歌と看做して居り、さて其の後現代まで何等の不審を挟まれることなく、見遁されて来てゐたのであつた」とし、二人のオリジナルな発想によるとしてきた従来の解釈を否定して、しかも公任の寄越した下句は「香盧峯の雪」などと異なり、「ほぼ當時の文壇からはさして愛讀愛誦を博しては居なかつた白氏文集中での凡作詩の中間詩句（ちゆうかんしきう）をば私かに拉し來り、さて、如何ばかり博識洽通を誇る清女と雖も（中略）『すこし春ある…』の如く和歌に翻案し去つた白詩句ならば、よもやそれと観破し、其の對句の詩意を以て直ちに應答することは出来まいと打案じつ、挑みかけた計畫の所行であつたのであらう」と位置づけておられる。当該漢詩は数年後に撰進された『和漢朗詠集』以下に所収されていない。つまり当該句は公任自身も選んでいない漢詩の詩句だったのである。

『枕草子』の贈答で踏まえられていると指摘された『白氏文集』卷十四所収の七言律詩「南秦雪」について詳しく検討してみよう。

〈資料六〉『白氏文集』卷十四「南秦雪」2

往歳曾為西邑吏 往歳、曾て西邑の吏と為り

慣從駱口到南秦 駱口より南秦に到るに慣る

三時雲冷多飛雪 三時雲冷やかにして 多く雪を飛ばし

二月山寒少有春 二月山寒うして 春有ること少なし

我思舊事猶惆悵 我は舊事を思うて なほ惆悵す

君作初行定苦辛 君は初行を作して 定めて苦辛せん

仍頼愁猿寒不叫 仍頼に 愁猿寒うして叫ばず

若聞猿叫更愁人 もし猿の叫ぶを聞かば更に人を愁へしめん

当該詩の頷聯「三時雲冷多飛雪 二月山寒少有春」と『枕草子』

当該章段の冒頭部分「二月つごもりころに、風いたう吹きて、空い

みじう黒きに、雪少しうち散りたるほど」と比較してみると、「二

月」「寒うして」「雲冷やかにして」「雪を飛ばし」の部分がそれぞれ

重なっており、状況設定が通じていることは明確である。「南秦雪」

の頷聯を共通知識として、公任は第四句「二月山寒少有春」をふま

えて「少し春ある心地こそすれ」という下句を寄越し、それに対し

清少納言は第三句「三時雲冷多飛雪」をふまえて「空寒み花にまが

へて散る雪に」と上句を返したことになる。初句を「空寒み」とす

ることで『白氏文集』『南秦雪』をふまえた謎かけと理解したこと

を示すことができたのだが、この論理で行けば「南秦雪」の頷聯は「春

夏秋の三時にも、雲は冷たくて、雪が舞うことが多く、二月になっ

ても、山は寒くて、春の期間が短い」ことを詩句に作っているのだ

から、「春の気配」は否定されていることにならう。

伊東倫厚氏は当該詩における「少」の字義を精査され、「少有春」は「春色が殆ど無い」という否定的な意味であるとおさえた上で、改めて公任の句を捉えなおし、「春有ルコトスクナシ」と「スコシ春有ル」の二種類ある当時の訓詁法のうち「いかにも和語らしく、且つ七音になる」「少し春ある」を採用した、と指摘されている。²²⁾

この延長線上に位置づけられるのが胡順粉氏のご指摘²³⁾で、「少有春」の部分は、春の気配がほとんどない、という否定的な意味に傾いた表現として見る事ができる」とされる。胡氏は「公任の句における『すこし春ある』のあらわす世界も、実際の現実的なものではなく、気持ちの上での仮想的なものであることになる（中略）その背後には、現実的には春の気配が沢山あるはずだという意味合いが含まれている」と解釈された上で、「白詩の『少有春』句を、当日の状況にびったり合うものとして再構成するためには、確定的な事実である『少有春』の世界を気持ちの上で架空なものに変換させる必要があった」ので、公任の下旬の「心地こそすれ」は「白詩の句を当日の天気と一致する内容の和歌として詠み変えるための媒介的な存在」と見て、「公任の句は、白詩の句『少有春』を『すこし春ある』と和語化して表現し、白詩の世界に基盤を持ちながらも『こころこそすれ』句を付加することによって、白詩の世界とは異なる、当日の特殊さをあらわしたものと見ることができるとし、「白詩の句の世界に依存しながらも、白詩の世界からの離脱をはかって

いる。いわば〈重なり〉と〈すれ〉の面を同時に具有している二重なものだった」ことを指摘される。『白氏文集』当該詩の「少し春ある」は「春の気配がほとんどない」として否定的な意味だが、「心地こそすれ」を付加して下旬を「少し春ある心地こそすれ」と仕立てることで『白氏文集』の世界からの離脱を意図した、と見る胡氏のご指摘は「内容上『少有春』の理由に当たると『山寒』の部分がぬけている」という点も含めて注目されよう。

ただ、春の気配に否定的な意味であった『白氏文集』の「少し春ある」を、二月末で「春の気配が沢山あるはず」だから「白詩の句を当日の天気と一致する内容の和歌として詠み変える」と解釈するより、むしろこの日の天気は春の気配を感じられないようなものであったと語る『枕草子』の本文に注目して、『白氏文集』の世界と公任のいる今日の現実世界が〈重なり〉と〈すれ〉の面を同時に具有している」ことをさらに進め、「春の気配は感じられないが、もう二月も末ゆえ、春らしさはどこかにあるはず」というように、その両面性に注目し考察してみてもよいのではないか。

『白氏文集』の世界を転換したものとして、坏美奈子氏は清少納言の返した上句を「原詩の世界を十分に承知した上で、その文言を原詩の世界とは異なる、現時点の状況に合わせて巧みに生かした方法」と見て「今日のこの景色にこそかえて春を感受するその手立として、散りくる雪を花に見立ててみせている」と指摘される。²⁴⁾

清少納言の発想として興味深いのが、順接で一首仕立てとなる贈答歌の視点で考察すれば、前提として公任は原詩と異なり、春の気配を感じ取って肯定的にみる立場で下句を寄越してきたことになろう。

そもそも清少納言は、公任が寄越してきた下句「少し春ある心地こそすれ」を受け取った時、どのように解釈したのだろうか。

五、清少納言の躊躇と機転

公任から送られた下句「少し春ある心地こそすれ」は、『白氏文集』「南秦雪」頷聯の第四句「二月山寒少有春」にみえる「少有春」がふまえられたもので、「少」の字義の検証から『白氏文集』において「春の気配は感じられない」と否定的にみる説が導き出された。一方で「心地こそすれ」を付加することで、その『白氏文集』の世界から『枕草子』当該章段の当日の世界へ転換が図られていることも導き出された。書き手清少納言は本文で「げに今日のけしきにいとようあひたる」（今日の様子によく合っている）としているが、このようにいろいろ考えられる下句を受け取り、しかも自分が返し作らなければならない状況に迫り込まれて、かなり困惑したはずである。その様子は当該章段本文の表現に繰り返し記されている。

〈資料七〉清少納言の躊躇

- ① これが本は、いかでかつくべからむと、思ひわづらひぬ。
- ② いかでか事なしびに言ひ出でむと、心一つに苦しきを、

③ げに遅うさへあらむはいと取り所なければ、

④ 「さはれ」とて「空寒み花にまがへて散る雪に」と、

⑤ わななくわななく書きて

⑥ いかにも思ふらむと、わびし。

⑦ これが事を聞かばやと思ふに、そしられたらば聞かじとおぼゆるを、

清少納言は、公任から下句を受け取った瞬間から、①この上句（本）はとも付けれられそうもない、と思ひ悩んでいた。主殿司に公任のほかどのようなメンパーがいるのかと尋ね、錚々たる連中が揃っていることを知ると、②どうして無難な答えができれば、と自分一人で悩み苦しむ。定子に相談しようとするが、一条天皇とお休みになっているのもそれもかわらず、主殿司に急かされるまま、③返事が遅くなればなおのこと取り柄もなくなるので、④ついに腹をくくり「えいやつ」と思い切って「空寒み花にまがへて散る雪に」と上句を作りあげ、⑤震えながら紙に書いて主殿司に渡し、⑥これを見た公任たちはどう思うだろうか、と心細く思っている。そして⑦公任たちの反応を聞きたいが、けなされているなら聞きたくないと、気に掛け振り回されている複雑な心境と行動を記している。

当時から公任が一目置かれる存在であったことに加え、「みないとばつかしき中」（公任をはじめ、俊賢などのいる中）で清少納言からの返事が披露されるという〈場〉の状況は、第七八段「頭中將

のすずろなるそら言を聞きて」において、頭中将斉信から送りつけられた「蘭省花時錦帳下」に対し、清少納言が主殿司に急かされるまま「草の庵を誰かたづねむ」と返し²⁵、時と同様の状況であった。

それに加え、公任から送られた下句「少し春ある心地こそすれ」を見た清少納言は、文字通り「それでも春の気配が感じられることだ」として肯定的な意味で取るべきなのか、それとも典拠の『白氏文集』「南秦雪」の「少有春」に従って「春色が殆ど無い」という否定的な意味で取るべきなのか、今日の空模様も考え合わせながら、公任の「真意」を測りかねていたのではないか²⁶。

清少納言は定子に、どちらの解釈に立って上句を付けたらよいか、なおさら相談したかったのだろう。しかしそれが出来なかったことは「上のおはしまして御殿籠りたり」という本文で明確に記される。おそらく公任たちは、一条天皇が定子のもとに渡御していることを承知でこの下句を送りつけ、清少納言が一人で対応しなければならなくなる状況を狙っていたのだろう。

こうした場合の対応は、どちらでも解釈できる「玉虫色」の回答をしておくのがよい。清少納言が返した上句は、肯定的にも否定的にも解釈可能なものであった。現代の解釈になお振幅があるのは、この点に起因するからなのではあるまいか。

おまけ

この視点に立ち、改めて清少納言が返した「空寒み花にまがへて散る雪に」を解釈してみたい。「寒い空から、白い花のように舞い散る雪に」という清少納言の上句は、今日の空模様（雪少しうち散りたるほど）に合った「雪」に焦点を当てて解釈すれば、公任が寄せた下句を「春の気配はまだ感じられない」として否定的な意味で受け取って返しことになる。一方、「花」に焦点を当てて解釈すれば、「それでも春の気配は感じられる」として肯定的な意味で受け取って返しことになる。つまり清少納言は、定子に相談できないまま主殿司に急かされぎりぎりの状況で機転を利かせて、否定的・肯定的のどちらでも解釈できる上句「空寒み花にまがへて散る雪に」を詠んで返したものと考えられるのである²⁷。

空から降りくる雪を花が散る様に見立てる発想は、『古今和歌集』以来の伝統的なものであった。

〈資料八〉空から降る雪を花に見立てる発想

- ①『古今和歌集』巻一「春上」雪の降りけるをよめる 紀貫之
②『古今和歌集』巻六「冬」雪の降りけるを詠みける 清原深養父

330 冬ながら空より花の散りくるは雲のあなたは春にやあるらむ

①は「霞たち」として春の訪れを予感させており、②は清少納言の曾祖父が詠んだ和歌であった。また①は類題集の『古今和歌六帖』²⁸第一

帖「残りの雪」の第一九番歌として、②も第一帖「雪」の第七三〇番歌として見える。公任や清少納言にとって、春に降り来る雪を花が散る様に見立てる発想は、典型的なものであったと言えよう。

この見立ては逆の発想も確認できる。

〔資料九〕散る花を空から降る雪に見立てる発想

・『古今和歌六帖』第六帖「桜」の第四一八二番歌

4182 桜散る木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける

桜の花が風に舞い散る様を、空から降り来る雪に見立てたこの歌は、宇多法皇主催の延喜十三年三月十三日『亭子院歌合』に「春」の第七番左歌（第十三番歌）として紀貫之が詠出した歌で、右歌の躬恒「わが心春の山辺にあくがれて長々し日を今日も暮らしつ」に対して「勝」と判じられている。公任も『拾遺抄』卷一「春」第四二番歌に「亭子院の歌合に 貫之」として入集し、『拾遺和歌集』卷一「春」第六四番歌にも見える。公任編の私撰集『金玉集』「春」の第十四番歌や『和漢朗詠集』上「落花」の第一三二番歌にも見えるから、和歌の伝統を踏まえたものとして公任もよく理解していた発想であった。一方、「花にまがへて散る雪」の発想は『白氏文集』「南秦雪」に見えないことから、清少納言が詠んだ上句は、和歌の見立てをふまえたものと見てよい。

このように章段構成の論理を考えていくと、源俊賢による「内侍」推薦奏上も新たな意味を帯びてくる。清少納言にとって「内侍」は、

第一六九段「女は」において「女は、内侍のすけ。内侍」と記しているほど懂れのものであったから、この上句の出来によって「内侍」に推薦しようとしてまで評価されたことは、至上の喜びであった。

公任が寄越した下句「少し春ある心地こそすれ」は、『白氏文集』でもあまり知られていなかった「南秦雪」の領聯を踏まえたものであった。受け取った清少納言はその典拠には気付いたものの、今日の空模様と合わせて考えると、「少し春ある心地こそすれ」を典拠の「少有春」本来の否定的な意味で解釈するべきか、それとも逆に二月末という今の時節に即して肯定的な意味で解釈するべきか、にわかには判断しがたく、かなり対応が難しい問い（下句）であった。そして定子に相談することも出来ない状況に追い込まれた清少納言は、急かされて、ついに独力で典拠の『白氏文集』当該部分本来の意味と伝統的な和歌の見立てとを融合させることで、どちらにでもとれる上句「空寒み花にまがへて散る雪に」を返して、この危機を無難に切り抜けた。当該章段は、こういった清少納言の才覚が男性貴族たちから『なほ内侍に奏してなさむ』となむ定め給ひし」とまで高く評価された顛末を記したものであるまいか。

【注】

(1) 金子彦二郎氏の指摘による。（『白氏文集と日本文学』主として平安朝の和歌との関係に就て）『国語と国文学』昭和十三年四月刊、のちに『平

安時代文学と白氏文集（句題和歌、千載佳句研究編）培風館 昭和十八年刊に所収）

- (2) 『枕草子』本文は、すべて三卷本系統第一類本の陽明文庫蔵本を底本とした松尾聰氏、永井和子氏校注・訳の新編日本古典文学全集『枕草子』（小学館、平成九年）による。ただし、一部私に仮名表記を漢字に改めた箇所がある。なお、当該章段は能因本系の代表とされる学習院大学蔵（三条西家旧蔵本）と比較しても、贈答の句それぞれに異文は認められない。
- (3) 増田繁夫氏は「実成以外に適当な該当者は探せない」（和泉古典叢書1『枕草子』の補註190 和泉書院、昭和六二年）とされるが、赤間恵都子氏は藤原実資を想定されている。『枕草子日記的章段の研究』三省堂、平成二一年）
- (4) 『清少納言枕双紙抄』の本文は、加藤警齋古注釈集成2の複製本（新典社、昭和六〇年）による。
- (5) 『春曙抄』の本文は「延寶二年甲寅七月十七日北村季吟書」の刊本奥書を有する青森県立図書館蔵工藤文庫本（国文学研究資料館マイクロ資料／請求番号二〇八一五八一三）による。
- (6) 金子元臣氏著『枕草子評釈』（明治書院、昭和十七年増訂二八版）による。
- (7) 五十嵐力氏・岡一男氏共著『枕草子精講』（学燈社、昭和二九年）による。
- (8) 塩田良平氏著『枕草子評釈』（学生社、昭和三〇年）による。
- (9) 石田穰二氏訳注『新版 枕草子』上巻（角川文庫、平成四年）による。
- (10) 稲賀敬二先生著『鑑賞日本の古典5 枕草子・大鏡』（尚学図書、昭和五五年）による。
- (11) 萩谷朴氏著『枕草子解環』二（同朋舎、昭和五七年）による。新潮日本古典集成『枕草子』上（新潮社、昭和五二年）も同じ。
- (12) 川瀬一馬氏校注・現代語訳『枕草子』上（講談社文庫、昭和六二年）による。
- (13) 田中重太郎氏訳注の対訳古典シリーズ『枕草子』上（旺文社、昭和六三年）

による。

- (14) 上坂信男氏・神作光一氏他全訳注の講談社学術文庫『枕草子』中巻（講談社、平成二三年）による。
- (15) 『新編国歌大観』第三卷（角川書店、昭和六〇年）による。
- (16) 伊井春樹氏・津本信博氏・新藤協三氏共著『公任集全釈』（私家集全釈叢書7 風間書房、平成元年）による。
- (17) 後藤祥子氏校注『公任集』（新日本古典文学大系二八『平安私家集』所収 岩波書店、平成六年）による。
- (18) 竹鼻績氏著『公任集注釈』（私家集注釈叢刊十五 貴重本刊行会、平成十六年）による。
- (19) 竹鼻績氏校注『大納言公任集』（和歌文学大系五四『中古歌仙集1』所収 明治書院、平成十六年）による。
- (20) 『新編国歌大観』第一卷（角川書店、昭和五八年）による。以下、『後撰和歌集』などの勅撰集は全て同書による。
- (21) 『白氏文集』は岡村繁氏著の新釈漢大系九九『白氏文集』三（明治書院、昭和六三年）による。
- (22) 伊東倫厚氏『枕草子』「少し春ある心地こそすれ」と『白氏文集』「二月山寒少有春」と一又名「少有春」小考」（『竹田晃先生退官記念 東アジア文化論叢』汲古書院、平成三年）による。
- (23) 胡順粉氏著『枕草子 表現の方法』（勉誠出版、平成十四年）による。
- (24) 坏美奈子氏著『新しい枕草子論』主題・手法そして本文（『新典社 平成十六年』による。
- (25) 小論「清少納言の返り」と「草の庵をたれたかたづむ」をめぐって」（『国文学攷』第一四三号、平成六年九月刊）を参照されたい。
- (26) 和歌における「少し春ある心地」の用例は、平安時代末期に藤原俊成が文治六年（一一九〇）五社百首で日吉社に奉納した「埋み火に少し春

ある心地して夜深き冬を慰むるかな」まで確認できない。当該歌は『風雅和歌集』巻八「冬」第八七九番歌に「日吉社へ奉りける百首歌の中に、炉火を」として、また『夫木和歌抄』巻十八「冬部三」第七五九二番歌に「文治六年五社百首」として見える。当該歌で俊成は「埋み火」を夜深き冬を慰めるものとし、「少し春ある心地」を肯定的にみる解釈で用いている。

(27) 五十嵐力氏と岡一男氏は『枕草子精講』において、『白氏文集』『南秦雪』の第三句に見える「雲冷」（雲冷やかにして）をふまえて「空寒み」と言い換えたことに清少納言の才能の非凡さを認めている。この「空寒み」の表現が当時の和歌ではかなり珍しく独創的なものであったことについては、針本正行氏が「枕草子自讃譚の構造（二）——三巻本九十八段を中心として」（『江戸川女子短期大学紀要』第五号、平成二年三月刊）において指摘されている。

(28) 『新編国歌大観』第二巻（角川書店、昭和五九年）による。以下、『万葉集』、『金玉集』、『和漢朗詠集』などの私撰集はすべて同書による。

(29) 萩谷朴氏著『平安朝歌合大成』（増補新訂）第一巻（同朋舎出版、平成七年刊）による。

【付記】

本稿は、平成二五年八月二九日に同志社大学室町キャンパス寒梅館六階大会議室において開催された「同志社大学人文科学研究所第18期研究会（京都と文化）」及び「科学研究費助成事業基盤研究C伝統文化形成に関する総合データベースの構築と平安朝文学の伝承と受容に関する研究」（研究代表者・福田智子氏）において、『枕草子』における先行文化の享受と変容の様相——その方法と評価を手がかりとして——の題目で口頭発表したものと、同年十二月八日に福岡大学本部キャンパス文系センター十五階第五会議室におい

て開催された第三五回古典研究会において『枕草子』「少し春ある心地こそすれ」の解釈と対応——『白氏文集』『南秦雪』の享受と変容の様相——の題目で口頭発表したものを基に再考し、論文にまとめたものである。貴重なご意見、ご指摘をくださった諸賢の学思に対し、厚く御礼申し上げます。

—ふるせ・まさよし、安田女子大学教授—